

嶋満神社便り

平成二十五年七月号 (第7号)

発行 嶋満神社奉賛会

続々、当社の狛犬さんのお話

第5号と6号では当社の狛犬さんの配置と向きの謎について述べました。もとより狛犬を神社の入口に置くようになったのは江戸時代であり、神社そのものの歴史、由緒とはあまり関係がありません。その設置については神社側よりも奉納者の意思の方が優先されることの方が多かったと前号で紹介した小寺慶昭氏は述べています。

実際明治になってから神社の一元管理を計った内務省への提出書類には、神殿本体や宝物に関する調査項目はあっても、狛犬の項はなかったそうです。

しかしながら、です。狛犬は鳥居と共に参拝者が訪れて最初に目にする神社の最も特徴的なものです。参拝者の気にならないはずはありません。実際もつと注目されてもいいものだという気がします。

戦前の当社の狛犬についての資料は残念ながらありませんので、当時の配置や奉納のいきさつに関する謎は永久に謎のまま置かざるをえません。

ところでここにもう一つ、忘れてはならない「謎」が残っています。はい、第5号で取り上げた「与保呂のお宮さんの狛犬」です。

子どもが玉を抱く形は当地から丹後(半島)地方にかけてのみ見られるそうですが、この阿吽一对の狛犬、大きさ、子どもの顔、台座の模様も含め、当社の狛犬とウリふたつです。どう見ても同じ職人さんか、石材店の手によるものと思えません。

与保呂の方には大正十年奉納の文字が読めます。当社のもその時期に奉納されたのでしょうか？

神社の由緒と違い、きちんとした書類が残っていないものであればこそ、尚一層、興味がそそられます。

最後は狛犬の寿命についてのお話です。

与保呂のお宮さんの狛犬は鎮守の森に抱かれてひっそりと鎮座し、苔むした「たたずまい」が一層風格を感じさせ

せ、いかにもありがたみがありそうです。



一方当社の狛犬は正に露座の宿命か、風化によるひび割れが目立ち、二度の動座による傷みもあるのか、とても気の毒な状況です。

デザインの問題がなければ、とてもこの両者が同一時期の奉納かといった発想は生まれてこないと思われるほど保存状態に違いがあります。

常に風化崩壊、新品奉納という歴史を繰り返してきたから、全国的にも狛犬に関してはあまり由緒についての話題が残ってこなかったのでしょうか。

傷みの激しい当社の狛犬さんが一日でも寿命を永らえることが出来るよう、大切にしたいと思います。

さて三号にわたった狛犬のお話、子どもを抱いた狛犬への疑問からスタートし、思わぬ方向へ発展しましたが、この小さな石像がとても奥の深いものだという認識を新たにしました。

最後にこの狛犬と言う素晴らしい研究素材を与えてくれた新舞鶴校の子どもにも感謝しつつお話を終えたいと思います。

完



(写真はいずれも津田家所蔵資料)

○来る八月二十五日(日)の例祭には
皆様どしぞお参りくださいませ。

○午後四時より 拝殿前にて